



福沢の旅案内で乗り込むだろうヨ (浅見徹教授退任記念号)

著者	青木 稔称
著者別名	AOKI Toshihiro
雑誌名	文林
巻	40
ページ	49-69
発行年	2006-03-20
URL	http://doi.org/10.14946/00001568



福沢の旅案内で乗り込むだろろうヨ

青 木 稔 弥

(一)

「元祖十返舎一九が作なる道中膝栗毛の初編刊行なりて世に流布せしは享和二壬戌^{いぬどし}歳の春にして当年^{ことし}を去こと既に六十九年に及」(初編上「凡例」)んだ明治三年に刊行を開始した『西洋道中膝栗毛^①』の第九編(明治四年刊)「稗史家^{けさくしや}の脚色^{かだ}」に以下のようにある。

「ときにせんせいこのせつの西洋ばやりへつけこんでなんぞ目さきのかはツたしゆこうはござりませんかお仕入がありますならおゆづりをねがひます

「そうさこれといふ仕入もないがれいの弥次北八がひきやくせんで航海のたびあるきを西ようだうちうひざくり

げとでもやらかしてかいたらすこしはうれるだろう

「これやアめうでございますしかしせいようはさておめていつさいからむちうのわたくしゆゑとりつきどころがござりませんせいどうかすじがきをねがひます

「おらアそんなひまはねへがふくぎはのたびあんないでおさきまつくらにこぎつけりやアどうなり稿成地中海まで
のりこむだらうヨ

本屋側の「西洋流行へ付け込んで」「目先の変わった趣向」が欲しいとの要望に呼応して「弥次北八が飛脚船で航海の旅歩きを西洋道中膝栗毛とでもやらかして書いたら少しは売れるだろう」とし、その方法として「福沢の旅案内で」「筋書を」作れば何とかなるだろうというのである。『西洋道中膝栗毛』創作の舞台裏を語ったというところで、図版1右端「一恵斎芳幾写真」の「写真」の一語からも、実事であるかのように思わせるものがある。実風景に近いものだとすると、第九編上見返し（図版2）に「仮名垣魯文戯著」「東京書肆 万笈閣梓」とあるので、右側にいる人物が先生の仮名垣魯文、左側にいるのが万笈閣主人ということになる。確かに、文久三年春刊の仮名垣魯文・山々亭有人編『粹興奇人伝』に一恵斎芳幾が画いた仮名垣魯文の肖像と右側の人物の顔は同一であり、左側の人物は、第十一編本文直後の「老実伏稟」に登場する「板元 万笈閣」（図版3）によく似ている。



図版 1



図版 3

図版 2

ただ、疑問は残る。仮名垣魯文が執筆した『西洋道中膝栗毛』は第十一編（明治五年刊）までで、その後を総生寛が書き継いで第十五編（明治九年刊）で完結ということになるのだが、この第九編の段階で、「あけすけに創作動機をしる」（越智治雄『近代文学の誕生』講談社 昭五〇・九・二八）す必然性があったのかという疑問である。

『西洋道中膝栗毛』と福沢諭吉『西洋旅案内』の関係を考察する前に、魯文の福沢諭吉観を確認しておくことしよう。『西洋道中膝栗毛』初編上の「作者魯文自記」「凡例」に以下のようにある。

趣向新奇を競ひ標目未発なるを可なりとするがゆゑに弥次北八の三世の孫等外国廻りの滑稽をもて此稗史の大意とすさるるからに題号も西洋道中の目あり遮莫僕が文盲なる書は草冊子の外を讀ず何ぞ学ばん異邦の事情然れども文物盛典の徳たる近世福沢先生を始め諸々の洋学先生が著述されし翻訳の書とばしからねばその階梯にとりつきて大略お茶を濁すものなり杜撰漏漏は稗官者流の性来なれば必ずしも論じて意中をそこね給ふな恥書ことを平常とすれば恥と思ふ事はあらず嗚呼自己ながら達者なる哉

「洋学先生」の代表として「福沢先生」があり、彼らの「翻訳の書」により「お茶を濁す」のだという。福沢諭吉が「洋学先生」の代表だというのは、第五編下の通次郎の発言「近頃出版する福沢本」への注「東京の俗間西洋のほんやく書をさしてふくざはぼんととなふ先生の功大ひなりといふべし」でも、同じ認識が示される。

魯文が福沢諭吉の著作を利用する頻度は高く、種明かしをしないことも多々ある。例えば、『安愚楽鍋』（明治四

五年)にある「福沢」の用例は

ひらけねへ奴等が肉食をすりやア神仏しんぶつへ手が合されねへのヤレ穢れるのとわからねへ野暮をいふのは究理学を弁
へねへからのことだけでスそんな夷に福沢の著かた肉食の説でも読せてへネ
(初編「西洋好の聴取」)

のみだが、初編自序冒頭の「世界各国の諺に。仏蘭西の着倒れ。英吉利の食だふれと。食台ていぶるに並べて譜いへど」の「仏蘭西の着倒れ。英吉利の食だふれ」も、福沢諭吉の著作を踏まえたものであった。興津要氏の注釈にあるような「この表現の背後には、『京の着倒れ、大阪の食い倒れ』という日本のことわざがあり、それを衣裳の流行の発生地フランスと古い料理国イギリスとにあてはめて並べていった」(日本近代文学大系1『明治開化期文学集』角川書店 昭四五・一 二・一〇)ものではなく、福沢諭吉の『条約十一国記』(慶応三年冬)に拠っている。「英吉利」の項に「國中一体に衣服よりも食物に奢る風俗なり。英吉利人の食倒、仏蘭西人の着倒といふ諺あり」(『福沢諭吉全集』第二卷 岩波書店 昭三四・二・一)とあるのである。

(二)

福沢諭吉『西洋旅案内』が『西洋道中膝栗毛』に初めて登場するのは第二編上で、

作者曰海上通路都て船中の弁理なるは西洋旅案内に委しければ茲に贅せず航海の便宜を得んと欲さば彼書を披きて概略を知るべし此編は唯兎戯を要とす

とある。初編に『西洋旅案内』が見えないのは、初編末尾に

○第二編は弥次北八の二個本町の大商人大腹屋広蔵の手代となり英国の博覧会へ赴く一回英仏の飛脚船に乗組まづ上海香港へ渡海の滑稽蒸気船中のおかしみなど引続きて出板すべし喝采々々

とあるように、初編の段階では、まだ船出さえていないのだから、怪しむには当たらない。ただ、第二編上「凡例附言」には

○当編は横浜の商個大商人大腹屋広蔵といへる人物を作り設けて彼が英吉利の龍頓なる博覧会へ発向を以て大意とす因て上海香港に渡海欧羅巴に航海するの船路は印度海飛脚船の通行を仮てものせり

○友人砂燕子先年仏蘭西の博覧会に至り彼国の風土大概を得たり故に彼人の一夕話聊耳底に止めたるを柱礎として此書を綴りかけたれど砂燕子目今東京に住せず故に尋問の路を断遺憾甚だし

とあり、「友人砂燕子」の「一夕話」が「柱礎として此書を綴りかけ」と述べていることには注目しておきたい。砂燕の句が初編上の十九丁表（図版4）にあるので、『西洋道中膝栗毛』を綴りかけた」時点では、砂燕に「尋問」することは可能であったのだろうが、その目算が狂ってしまったのである。その結果として、第四編上「総編本文読例」では、以下のように、

○作者此小冊の注文を諾ひて彼我的問答に及ぶ条を綴らんとするに蛮語に通ぜず緯は西洋旅案内を柱とし趣向は友人砂燕子が航海の日記を礎とせり遮莫俗に云見ぬことは話説にならず実地に渡らぬ聴取傍聞万国の方に一箇も
的当あたれることは有べからず看官僥倖に海容給へかし

『西洋旅案内』が「友人砂燕子」の「航海の日記」と並ぶものとなっている。

さて、ここで、さらに考えておくべきは、砂燕に「航海の日記」と呼べるほどのものが存在したかどうかである。

『西洋道中膝栗毛七編序』において、砂燕自身が



図版 4

前つ季法朗西なる博覧会にをもむく海路印度太平の洋を過碇泊の港みなとは概略一見なしたれば東京に上りし際魯文兄を訪れて柳橋に一日をくらし花街に一夜を語りあかせしよしなしごとさへ趣向の種となりぬることの最をかしく夫に因みて序せよと乞はれ曲りなりに記すになん

と述べているので、先に引用した第二編上「凡例 附言」にいう「一夕話」が正確なところであろう。当初の目算が大幅に狂って、第二編の段階では、「印度海飛脚船」について知るための参考書にすぎなかったはずの『西洋旅案内』が、想定外に大きな存在になってしまい、第四編の段階では、ほとんど唯一の羅針盤ということになったようなのである。

(三)

『西洋道中膝栗毛』において『西洋旅案内』がどのように利用されているか、具体的に見ることにしよう。第二編上では二章に掲げた以外に

支那の上海は我横浜より行程五百里五日路を経て達し彼南京を距こと七十余里と聞へたり楊子江といふ大河の口なる繁昌の港にして人の数二十万西洋諸国の商売船支那の小船も多く出入市中に城の構あり古歴三国の時呉の孫権が繩張にて建安城と号るとぞ

が『西洋旅案内』巻の上「印度海飛脚船の立寄場所」を踏まえている。

上海は支那の南京を距ること七十里余、楊子江といふ大河の口にある港にて、人の数二十万人。西洋諸国の商売船並に支那の小船も出入し、繁華なる場所なり。其土地の産物は絹布、象牙の細工物等。又市中の外に茶園ありて、夥しく茶を製して外国へ売出す。○市中に城構あり。建安城といふ。支那の人は専らこの構の内に住居し、外国人の家は構の外にあり。此城は古代三国のとき、呉の孫権が繩張せし城とて、名高き古跡なれども、近来は支那の政事不行届にて、英吉利、仏蘭西へ警衛を頼み、城中には外国の旗印を建り。○気候は大抵日本と同じことなれども、湿地にて水あしく飲水に困る。コレラなど伝染病の流行するときは死人多き由なり。

上海を出帆して香港まで四百里、船路四日にて着すべし。

香港は支那の南東の方にある島なり。長五里、巾三里、岩山のみにて草木少く平地なし。もと支那の領地なりしが、天保十三年英吉利との合戦に、支那の人敗北して和睦のとき、この島を英吉利へ与へてより、永代英吉利の領分となれり。其後追々英吉利人の家を建、交易場を開き、近来は尚又寺を建立し学問所を設け、人の数も次第に増して繁昌の港となれり。

右の引用の前半が第二編上の材源で、後半は第三編上の

支那の上海（じやうかい）を出帆して英領なる香港まで船路四日にて着すべし乍（そ）麼香港は支那の東南の方にある孤島（こしま）なり長サ五里巾三里岩山（いはやま）のみにて草木少く平地なし元來支那（もとから）の領地なりしが近世英吉利領（ちかじろ）となりしより英人追々住居（すまゐ）を移し交易場を開き寺院を建立（たて）学問所を設けて人の数も次第に増し繁昌の港となれり

の材源となっている。『西洋旅案内』が移動と各地の説明、魯文が停泊地のドタバタ劇の創作という構図が成立した形である。続く第四編と第五編についても、

「シンガポウル」の地へ上陸せり此地は印度海の島にして英吉利領なり赤道より北の方二度の所にありて時候甚だ暑く四季の差別なしいつも夏の通りにて日本の寒中にては胡瓜茄子西瓜の類沢山ありて此余の菓実（くだもの）何品によらず生じ（あたひ）価も至ツて安しとぞ又此島には虎多く折々人を害すといへり

（第四編上）

シンガポウルは英吉利領の島なり。赤道より北の方二度の所にありて、時候甚だあつし。四季の差別なくいつも夏の通りにて、日本の寒中にては、此地には胡瓜、茄子、西瓜の類、沢山あり。又此辺の島々には丁字、胡椒、生姜、椰子、芭蕉、パイナップルなどいへる菓実あり。パイナップルは草の実なり。形（まづか）ち松子に似て大なり。味（あぢはひ）甚だよし。芭蕉も日本にては実を見ざれども、この辺の芭蕉には夥しく実を結て、水菓子に用ゆ。味殊に甘く、日本の甜瓜（まくほうり）に似たり。この外蜜柑、橙実等、何品によらず沢山にして価もやすし。○此島には虎多く、折々人を害すとなり。

（『西洋旅案内』）

「シンガポール」を出帆して「マラッカ」の瀬戸に入り右に「マレヤ」の地方を見左に「スモタラ」の島を眺めて次第に北西にうち向ひぬ
(第四編下)

シンガポールを出帆してマラッカの瀬戸に入、右にマレヤの地方を見、左にスモタラの島を詠て、次第に北西に向ひ印度海に出、セイロンといへる島の内にあるポイントデゴウルなる港に着す。
(『西洋旅案内』)

「ピナン」といふ小島によりて石炭を積たくわへ夫より印度海に乘いだし「セイロン」といふ島のうちなる「ゴウル」といへる港に着しぬこのセイロンは英吉利領にて島のめぐり三百余里港数ヶ所あり飛脚船の入津する港を「ポイントデゴウル」といふ爰も「シンガポール」の時候と等しく産物も相をなじそのうちに桂枝多く第一ばんの名産たれば一名を桂枝島とも号るとぞ且山中には象多くこれを馴して牛馬の如くつかふ者ありされば象牙も沢山にてさまざまに細工したる売物もあるといへり
(第五編上)

英吉利の飛脚船なれば、途中にてピナンといふ小島に寄て石炭を積む。

ピナンはマラッカの瀬戸の中にて右手にあり。此島も英吉利領の領分なり。土地産物の模様は略シンガポールに同じ。

セイロンは往古葡萄牙の領分なりしが、一度荷蘭に取られ、其後又英吉利の領分となれり。島の周囲三百里計。港数ヶ所あり。飛脚船の入津する港をポイントデゴウルといふ。時候は略シンガポールと同様にて暑し。産物も同じく椰子、蜜柑、胡椒の類多し。殊に桂枝はこの島第一番の名産にて諸国へ積出す。ゆへに一名桂枝島ともい

ふ。山には象多し。或はこれを馴して牛馬の如くつかふ者あり。就ては象牙も沢山なり。色々に細工したる売物あり。

(『西洋旅案内』)

土人みな仏法に帰依すること印度中に冠たり島の中に「アダムが峯」とて高サ千二百間余の山あり釈迦此山に籠りて法を説たる霊場といふ

(第五編下)

セイロン島は釈迦如来誕生の地にて、島の人皆仏法に帰依せり。島の中にアダムが峰とて高き山あり。高さ千二百間余、島人の物語に、釈迦如来この山に籠て法を説き、遂に其頂より天上に登り、今に至るまで其足跡ありといふ。

(『西洋旅案内』)

と、『西洋旅案内』に依存する割合の高さは変わらないが、『西洋旅案内』では説明できない箇所も混在している。第五編上の「セイロン」に付せられたルビ「錫蘭」である。『西洋旅案内』では「セイロン」に漢字を当てることをしていないのである。福沢諭吉の用法の一を示せば、第八編下に「そんなものをよむより世界国尽でもよみなせへ」とある『世界国尽』(明治二年刊)では、「西論」に「せいろん」のルビを付している。「錫蘭」の表記は、おそらく、第七編上に「頃日の新刻輿地誌略を披読たるに」とある『輿地誌略』に基づくものであろう。第七編の段階で初めて『輿地誌略』を読んだかのように記しているが、第五編下に『輿地誌略』巻二が材源と指定できる箇所がある。

錫蘭は前印度海角の大島にして「ポーク」の海峡を隔て長サ百二十里人口一百五十万あり往時は葡萄牙の所領なりしが式百余年まへ和蘭に属し後五十年前より英国に属せり西岸に可倫破府あり即ち島の内の都府也亦「ポイント、デ、ゴール」の港は西南のきしにあり此島は二千四百余年前釈迦如来誕生の地にて仏堂寺院あまたあり

(第五編下)

錫蘭島ハ前印度海角ノ大島ニシテ「ポーク」ノ海峡ヲ隔テ長サ百二十里人口一百五十万アリ往時ハ葡萄牙ノ所領ナリシガ二百余年前和蘭ニ属シ後又五十年前ヨリ英国ニ属ス島内山多シト雖モ豊饒ノ地亦少カラズ(中略)西岸ニ可倫破府有リ即チ島中ノ都府ナリ又「ポイント、デ、ゴール」ハ西南岸ニ在リ共ニ枢要ナル海港トス此島ハ二千四百余年前釈迦教法ヲ修シタル地ニシテ仏堂寺院有リ土人皆仏法ヲ尊信ス

(『輿地誌略』卷二)

『輿地誌略』の「錫蘭」のルビは、左に「セイロン」、右に「シロン」である。

(四)

「第六編はセイロンの港ゴールを出帆してアデンといへる島に至るの船路千里九日の船中徒然の余り通次郎外国新聞を翻訳し普魯士と仏蘭西の大戦争を軍談師の口調に弁ずるの一回」(第五編の次回予告)なので、『西洋旅案内』の利用はなく、第七編上の冒頭に

地球自ら転りて一周すれば昼夜を生じ太陽を繞ること一周にして一年となる説あきらかにわかりてより人の心に油断なく元日から大晦日のノ括りを算へ寝れば起るの活計を夢に見るまで心を用ひ利を得る的は光陰の矢よりも疾き開化の人氣彼飛脚船に乗組たる博覧会の日本人等は蒸氣の水勢烈しきに千里の船路百里にならし僅に十日歟九日日出たく海上無事に印度海の大洋をうちすぎて紅海の入口なる「アデン」といへる地に着せり此地も英吉利の領分にて時候は青錫などより熱く土地柄至てよろしからず草木少く人の数一万人余商売も繁昌せず唯飛脚船などへ石炭を積込む用意をなすためのみされば此辺を渡海する船「セイロン」を出帆してより外に立寄べき港なきゆへ何れもこゝに碇を下し泊らざるものなしといへり

右は西洋旅案内の書中より抄出して彼風土の概略を誌せり然るに頃日の新刻輿地誌略を披読たるに亞細亞洲の部亞拉比亞の条下に云〇亞丁の地方は紅海の入口に在り三十一年前より英国に属し歐洲より東洋に往來する飛脚船の碇泊場にして紅海咽喉の地なり故に漸に繁盛し近歳は其人口四万にいたる云云 惟ふに旅案内の説と人口の異同あること彼書の著者福沢氏の欧羅巴に航海せられしは文久二戊年にして今より以前十歳の星霜を経たり曾て輿地誌略は方今の新聞を交へたる当年の新書にして各国開化日に進むの時勢粧人種蕃殖昨日におなじからざるを知るべし僕当地の情景を綴るにおよびてこの一事に疑惑しが兎戯の小冊敢て事実を考据せんも所謂椽の下のちから持勞して功なしとおもふものから両書の中庸を取て能加減にごまかす事左の如し

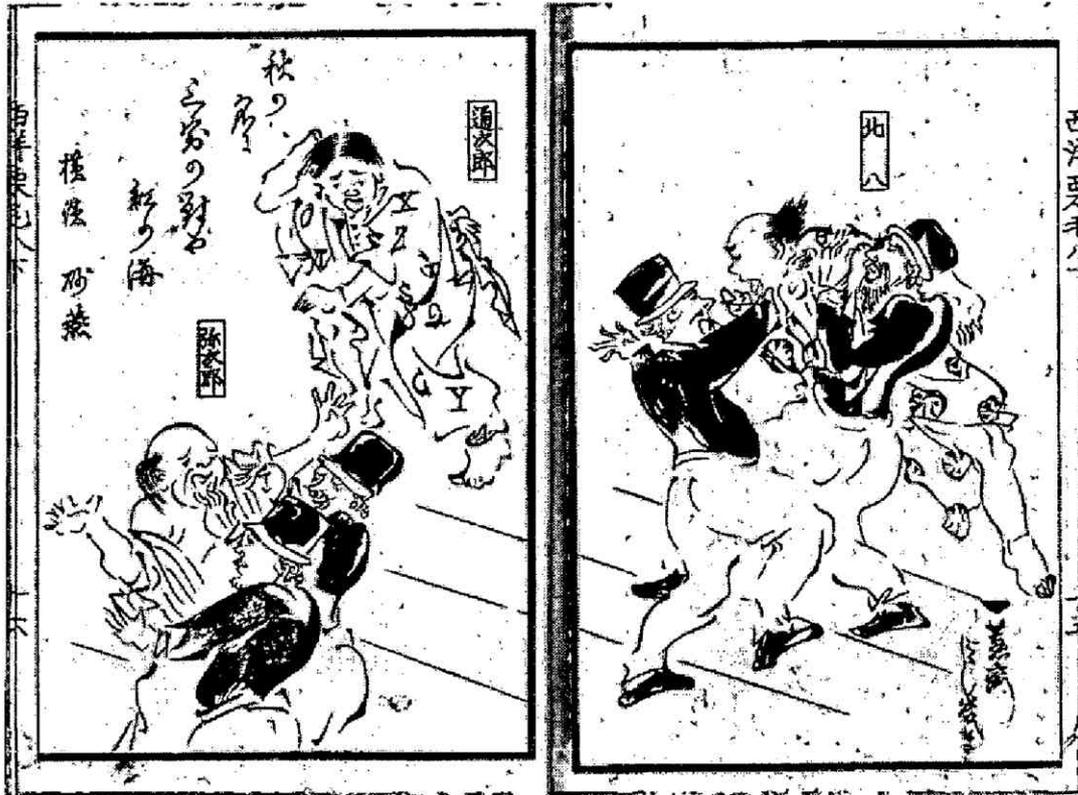
とある。「抄出し」たという『西洋旅案内』の該当箇所は以下の通りで、

セイロンよりアデンまで凡千里、船路九日にて達すべし。

アデンも英吉利の領分なり。紅海の入口にあり。時候はシンガポール、セイロンなどよりあつし。土地柄よろしからず、草木少し。人の数一万人余。商売繁昌せず。唯飛脚船などへ石炭を積込む用意をなすのみ。されどもこの辺を渡海する船は、セイロンを出帆してより外に立寄るべき港なきゆへ、何れもこゝに碇泊せざるものなし。

先に引用した第五編下の該当箇所以後続するものである。『西洋旅案内』が移動と各地の説明、魯文が停泊地（もしくは船内）のドタバタ劇の創作という構図は維持されている形になっているもの、『西洋旅案内』への信頼は揺らぎ、「労して功なし」の気持ちに傾きつつあることが窺える釈明ぶりである。

この第七編には前述したように、砂燕の「西洋道中膝栗毛七編序」が掲載されている。砂燕との交際が復活したということであろうか、砂燕の句が入った挿絵が、初編上以来久々に、第八編下（図版5）と第十一編下（図版6）に掲載される。第四編上「総編本文読例」にいう「西洋旅案内を柱とし趣向は友人砂燕子が航海の日記を礎とせり」どころか第二編上「凡例 附言」の初期構想「友人砂燕子先年仏蘭西の博覧会に至り彼国の風土大概を得たり故に彼人の一夕話聊耳底に止めたるを柱礎」とすることも、魯文さえ積極的に働きかければ可能であったにちがいない。だが、魯文が選んだのは、第八編の「凡例附言」に以下のように記すことであつた。



図版 5



図版 6

○拙著の膝栗毛僥倖さいはひに時好にかなひて発行毎部千に下らず梓客はんもとの耳たぶ作者のまぐれ当り喝采やんや々々と讚すべし是而乍しかしまがら標目による所敢て作者の功いさほにあらずとせん

「標目」がよかったから売れ行きがよいので、作者の手柄ではないというのである。第九編「稗史家の脚色」の「おらアそんなひまはねへがふくざはのたびあんないでおさきまつくらにこぎつけりやアどうなり稿成地中海までのりこむだらうヨ」との、暇がないものの『西洋旅案内』さえあれば地中海まで行き着けるとの言と結びつけて考えてみることにしよう。「膝栗毛」の「標目」と『西洋旅案内』さえあれば、魯文以外の人間でも十分に完結できるとのメッセージが籠められているに違いないのである。

(結)

『西洋旅案内』は第九編上や第十一編上、第十一編下でも利用されているが、「ふくざはのたびあんないでおさきまつくらにこぎつけりやア」というわけにはいかず、『輿地誌略』以外に、渋沢栄一『航西日記』卷之二(明治四年刊)を新たに導入する。「僕が拙趣向此頃発行の航西日記該祿かいりくの条と其事相似たるも亦奇遇と云べし」(第十編下)は、もちろん、偶然の一致などではないのである。第十一編上の通次郎の「西洋旅案内を毎日素読よんで暗記そらんじてゐるのだから本の通りで間違へねへのサ」との言は、その意味では正しいのである。

第十一編下巻末に板元、万笈閣による「老実伏稟」がある。

御花主様方ますます御きげん能恐悦至極にぞんじ奉候従つて私店にて製本仕候西洋道中膝栗毛の義日にまし繁昌
仕り有がたき仕合に存奉候扱作者魯文申候は只今まで無益の戯作に日月をついやし候事開化の御治世にたいし恐
いり奉候次第二つき聊か御国益にも相成るべき小冊を著述仕り度と左の目録持参致候ニ付早速注文仕候間出板の
節御求御高覧のほど相変らず奉願上候

魯文に「無益の戯作」をやめたいという希望があるというのである。『西洋道中膝栗毛』そのものについて述べた訳
ではないが、投げ出したいたい気持ちに傾いているのは事実だろう。その結果として第十二編冒頭に魯文の「西洋膝栗毛次
編依頼之記」が掲載され、

野蕃未開の弥次郎喜太八。維新作の初編の始めに。飛脚船の鱸に属き。洋行に船足踏かけ。航海進みて開化の域
に。着せんとする十二編。元來作者は不知案内。浮雲瀬戸を越へんより。此辺で船を乗換させんと。亜欧の境ひ
を区分にて。地理に明るき寛船生を。頼むは太平海上無事に。米国までも乗切らせんと。慮ふ不佞が水母の蝦眼。
万笈閣と船客を。依頼の一札後述の爲め。杜撰の証書件の如し

総生寛に引き継がれることになる。第十一編下の本文末尾は、

船は次第に地中海を西へくと進み行その入口なるシブラルタルの瀬戸を目的て乗入りツ、着を示す祝砲に土人の眠りを覚しけり○ストンドロくくく

だから、魯文は「どうなり稿成地中海までのりこ」んだのだが、その本文末尾に続いて掲載された「作者魯文看官へ謹んで告条」(図版7)にいう

英国博覧会をもて大団円とせまく欲す開場よりの腹稿なれば第十五編に結局せん目論なり然りと雖北亞墨利迦洲なる合衆国は方今五大洲中有名無二の富国にして其大都府華盛頓「サンフランシスコ」「カリホルニヤ」「ニウヨルク」など繁盛殊に勝れりと聞ものから此編十五輯の結局に拾遺して

亞墨夜話 西洋膝栗毛拾遺 初編

加此く表題を設け著述の腹稿意中に収めり当編は彼國



図版 7

へ航海せし友人の紀行を借得て目前の滑稽に僕が拙作の恢諧を潤色なしたれば佳興はいとく深かるべき小冊子なり当年此編の結局発兌を待ずして神速に著述の功を奉し引続き出版せまく欲せば大方の花主右の表題を暗記給ひて不相変御求高覧の程一偏に冀望し奉る条を梓客万笈閣主人と共に希ふ

「第十五編に結局」は総生寛に委ねられたのである。第三編に序を寄せた総生寛は「ふくざはのたびあんないでおさきまツくらにこぎつけ」「結局」した後には、第十五編末尾に

次編は西洋道中膝栗毛拾遺として一先横浜へ帰国之上世界の富强共和政治の大国亜米利加合衆国へ航海し紐育港より上陸して所々遊覧の景況さきの諸編よりまた一層勉励筆を渾ひ新説珍話の滑稽を尽し御覧に入れたてまつり候

と予告して、魯文の「西洋膝栗毛拾遺」の「腹稿」をも、おそらくは『西洋旅案内』巻の上「太平海飛脚船の立寄場所」を利用し、実現しようとしたが、未刊に終わったようである。本編そのものが竜頭蛇尾に終わったのであるから、やむを得ないこともかもしれない。

- (1) 仮名垣魯文の著作の引用は原則として初出によるが、繰返し記号の一部を開き、ルビの一部と割注を省略した。図版1と2は架蔵本、図版3、7は神戸松蔭女子学院大学蔵本である。
- (2) 『粹興奇人伝』は、日本近代思想大系18『芸能』（岩波書店 一九八八・七・二二）に翻刻と肖像画の写真版、佐藤悟「異本『粹興奇人伝』——解題と影印——」（実践女子大学文芸資料研究所「年報」第十四号 平七・三・二〇）に全丁の写真版がある。
- (3) 越智治雄氏は「あけすけに創作動機をしるしているが、それをそのままに信じて際物性をうんぬんしても、この作品について何も語っていないことになるう」、「未知の外国への作品の旅立ちには魯文なりの準備が整えられていた。細部のリアリティへの配慮を重ねてこそ、『放言題の。虚を実』の「ぶつゝけ書」が生きようというものである」と指摘している。
- (4) 『西洋旅案内』からの引用は『福沢諭吉全集』第二巻（岩波書店 昭三四・二・一）によるが、パラルビとした。
- (5) 小池正胤氏は「著者を交代したのは魯文が巡回講師として神奈川県に雇われたため」（『日本現代文学大事典 作品篇』明治書院 平六・六・二〇）としている。

付記 本稿は「魯文プロジェクト」の研究会（国文学研究資料館）での口頭発表を基にしている。